小学生の部

最優秀賞

平氏の亡霊たちがのぞんだことは

焼津市立豊田小学校　六年　杉山慶亘

小泉八雲が書いたたくさんの作品の中で、「耳なし芳一」はかなり恐ろしい話だ。壇ノ浦の合戦以来七百年もの間『鬼火』となってさまよう平氏のおんりょうたち。かにの甲らまでをも人間の顔にさせてしまった一門のうらみの大きさ。夜ごと見事なびわの音に合わせ、平家物語を聞かせてもらったにもかかわらず、芳一の耳だけをもぎ取っていった平氏の亡霊。もぎとられた両耳から血を流しながらも一言も言わずにじっと座っている芳一。何と気味の悪い話だろうと、読みながらぼくは鳥肌が立った。

『平家であらずんば人にあらず』平氏はこんな言葉を残した。確かに清盛が建てた厳島神社ははなやかな寝殿造りで、朱色の柱が美しかった。海に浮かび、何だかこの世のものとはいえない気がした。水晶や金が使われ、美しいもようが描かれた平家納経にも驚いた。お経を写す紙にもこんなぜいたくができる平氏というのは、当時本当に大きな力があったことがわかった。

でも、僕は不思議だった。こんなに権力があり、ぜいたくばかりしていた平氏は、亡霊となった時、なぜ芳一に『壇ノ浦の合戦』の話を聞かせてほしいとたのんだのだろう。壇ノ浦の合戦と言えば、平家が源氏にほろぼされた戦いだと社会で勉強した。武将として戦い、敗れただけでなく、女性や子どもたちまで入水した、そんな悲しい話をなぜ聞きたいのだろうか。ぼくが亡霊だったらそんな話を聞かせてくれとはたのまない。「平氏は強かったんだ。朝廷で重要は地位を独占し、勢力をふるっていた時のこ

とを話してほしい。」とたのむのに…。でも、自分たちが強かった時のことを思い出すと源氏がにくらしくなる。ほろぼした源氏をうらみに思う気持ちが強くなる。平氏の亡霊はそうではないのではないか、と思った。どんなに権力があっても、ぜいたくをしていても結局はほろびてしまう、そんな悲しい平氏の運命に同情してほしかったのではないか。自分たちの気持ちをわかってほしかったのではないか、ふとそんなふうに思えてきた。以前「夏休み子ども講座」で八雲の怪談について教えてもらったことがあった。その時「八雲の話に出てくる妖怪は、人間をうらんで悪さをするのではないよ。」と聞いた。そうか、平氏の亡霊もやっぱりさみしかったのかもしれない。

平氏の亡霊は七日間、芳一にびわを聴かせるよう命じた。しかし和尚さんのおかげで芳一は四日目に救われた。もし七日間聴かせていたら…。和尚さんは芳一が八つ裂きにされると言ったが、ぼくはそうは思わない。びわを聞かせ終わったら、芳一を無事に帰してくれたのではないかと思う。芳一のびわを聴きながら、初めは激しく、悲痛なさけび声をあげていた彼らが、次第にすすり泣きに変わり、最後にはもとの静けさにもどっていった、と本に書いてあった。芳一のびわの音になぐさめられたのではないか。悲しみ、さみしさのあまりさまよっていた亡霊たちが、ようやく心安らかに成仏できるチャンスだったのかもしれない。「人が亡くなった時、お葬式の後に『初七日の法要』というのを行うよ。」と母に聞いた。せっかくのチャンスをなくした彼らが少しかわいそうに思えた。

恐ろしいなあ、気味が悪いなあ、そう思って初めは読んでいた話だったが、今は何となく悲しいような苦しいような話だと思えるようになった。芳一のびわをぼくも聴いてみたかった。